夕焼け通信 1367号　2022.9.12
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その2）113

木幡智恵美

秋（2）

新たに出現した恐るべき敵の正体は、ワルナスビ。数年前、畑のお隣の家のGさんが、「うちの牛糞使って。わし一人じゃ使いきれんから」と言われるので、お言葉に甘えて何度か拝借した。その際、牛糞の山に生える見慣れない緑の葉が気になってはいたのだが…。そのワルナスビが持つ武器というのは、茎にも葉にも無数に生えている棘だ。ズボンを履いていても足がチクチクする。刈る際は軍手では痛くて触れないので、夫が買って来たごわごわの分厚い手袋を使う。花は、名前の通りナスに似た白い可憐な花を咲かせるが、実はというと、大きさはビー玉くらい、黄緑に濃い緑の筋入りで、固まってぶら下がる様は不気味な感じがする。そして、そのしぶとさと言ったら。刈った数日後に行くと、切り口から枝を伸ばし、緑の葉を広げている。さらに、根が果てしなく深く潜っていて、引っこ抜くとぷつんと切れてしまう。わずかの期間に畑全体にまで広がってしまった。まさにワルナスビだ。

カヤツリグサも相変わらず私を苦しめる。ダイコンの種を蒔いた次の週、ハクサイの苗を植えるところを起こしてもらい、土の中から紐で繋がった黒い球根を拾っていく。ふと横を見ると、あれだけ黒い塊を取り除いたのに、もうダイコンの双葉の周りに黄緑色の尖った芽が生えている。空しさを抱えながら、止めることも出来ず、無駄な抵抗を続ける。そして、重い気持ちのまま、ハクサイの苗を植え、アーチ形の支柱を埋め込み、ネットを張った。

帰りに平田に米を取に行く。三十キロの米を今年は三袋だけ頼んだ。毎年六袋だったのが、今年は半減。いつもお世話になるAさんが出てこられ、「まあ、お祖母さんはそげに食べられよっただろうかと話してましたわ」と、言われるので、「いや、一人減ったのもあるんですけど、息子が長期出張に行ってたこともあって、まだ三袋残ってるんです」と答える。米袋は、夫と二人掛かりで運んだ。去年までは、各自で一袋ずつ運べたのに。何年か前は、娘のアパートの三階まで一袋ずつ抱えて運んでたっけ。子どもたちが食べ盛りの頃は弁当もあり、十キロの米が十日で無くなっていた。家族が減り、米が減り、老化した体は力が無くなり…。まだ初秋なのに、人生の晩秋を感じさせられる日となった。

人生の誰彼 10

今岡　幹

夏休みの思い出

新学期が始まり、通勤時に再び集団登校の子供たちの姿を目にするようになりました。この子たちには、これから様々なことが起きる長い人生が待っているんだと思うと複雑な心持ちになったりもするのですが、とりあえず今日も一日元気で行ってらっしゃいと心の中で声を掛けています。

昔々、小学校六年生の夏休み前のことでした。いつものように学校から帰宅すると家に母の姿はなく、夜勤明けの父と幼稚園から先に帰っていた弟がいました。おもむろに父は私と弟に面と向かうと諭すようにこう言いました。「お母さんは出て行った。もう帰ってこないかもしれない」

その後夏休みに入るとすぐに、私と弟は出雲市の町外れにある父の実家に預けられ、その殆どを祖父母の下で暮らしました。その間どんな思いで何をして過ごしていたのか、何故か全くと言っていいほど記憶がありません。誰しも子供の頃の出来事をひとつひとつ事細かく覚えているわけでもないでしょうが、いつもとは違う夏休みなのだから何かしら心の奥に印象として残っていそうな筈なのに、それが皆目思い出せないのです。

例えば祖母が毎日どんなご飯を食べさせてくれたのか、記憶を振り絞っても出てこない。祖父は手先の器用な人だったから、きっと一緒に何かを作ったりして遊んでくれた筈ですが、これまた忘却の彼方です。

そういえば覚えていることがひとつありました。休みの途中、父が私達の様子を見に来たときに『別冊冒険王』を買って来てくれたのです。嬉しくて何度も読み返しました。当時はそれくらいしか楽しみがなかったのですね。その『別冊冒険王』は、裏表紙が外れてボロボロになりながら今も手元に残っています。手に取ると何故か幸せな気持ちになるから不思議なものです。

祖父の死後のことです。平成三年に海部総理大臣より戦後のシベリア抑留者に対し慰労の思いを込めた書状と銀杯が贈られました。祖父は終戦時にソ連軍により拿捕されシベリアに抑留された日本兵の生還者だったのです。祖父から戦争の体験談を聞いた覚えが殆どない私にとって、それは驚愕の事実でした。筆舌に尽くし難い過酷で悲惨な体験をしたであろうことは想像に難くありません。せめて生きているうちにと思うと残念でなりません。

30代フリーター　やあ、ジイさん。中国の経済成長をあと押ししてきた日本はその果てにいま、国際ルールをはみ出すようなことをするこの大国に振り回されている。そんなストーリーのニュースを朝日新聞が報じていた（8月30日朝刊）。

年金生活者　中国を支援してきたのは自民党の保守本流と呼ばれる勢力だ。派閥では田中派や宏池会に代表される。その基本路線を特徴づけるのは「軽武装と経済優先」だ。

「軽武装」は自民党の党是とは異なり、憲法9条の堅持を意味した。戦争の放棄をうたうこの条項は先の大戦での日本の加害責任を認める条項でもある。最大の加害のひとつが中国侵略だった。保守本流の政治家たちは中国への償いなしに戦後の日本外交は成り立たないと考えた。

「軽武装」と両輪をなす「経済優先」は資本主義を発展させることを意味した。資本主義は辺境の存在を必要とする。開発された先進地域と未開発の辺境とをつなぎ、その落差を利潤の源泉としながら発展してきた。かつての中国はその辺境に該当した。保守本流政権が中国のWTO加盟に力を尽くしたのも、先進地域と辺境をつないで両地域の落差から利潤を搾り出す狙いがあったからだ。

この試みは成功し、アメリカに次ぐ世界第2位のGDPの経済大国を出現させた。アメリカにとってそれは自国にふんだんに利益をもたらしてきたドルの基軸通貨の地位を脅かしかねない事態を意味する。アメリカが中国との対決姿勢をむき出しにし始めたのはそのためだ。

30代　両大国の対立は台湾をめぐって緊張を増している。

年金　中国が台湾を自国の一部と強調するのは、持ち物のひとつを失うのを嫌がっているのとは違う。台湾を失えばすべてを失うかもしれないと恐れている。

30代　台湾の独立を認めれば中国共産党の支配の正統性が崩れるからだと言われている。共産党は内戦で大陸から追い出した国民党が台湾に逃れるのを阻止できず、この島をいまだに実効支配できないでいる。国民党を倒して成立したことに共産党政権の正統性を置く限り、その正統性はまだ完成したとは言えない。なんとしても台湾を支配下に置かないと、政権は常に不安定部分を抱えることになる。

年金　その見方は間違いではないが、背後に中国がいまなお引きずる「帝国」の伝統があることを見ないと、共産党政権の台湾への執着は説明しきれない。

帝国は他の諸国家に対して圧倒的な強さを持っているので、服属する国家がなくても存立できるように見える。だが、それは錯覚だ。服属する国家は帝国のつっかえ棒であり、それを失うことは支えを失うことを意味する。服属国家があるからこそ帝国の権威が保たれ、民衆を服従させることができる。台湾はそうしたつっかえ棒のひとつとみなされている。

かつて「世界帝国」だった時代の中国の服属国、つまりつっかえ棒になっていた地域として朝鮮半島、日本、ベトナムなどがある。その名残をいま北朝鮮との関係に見ることができる。中国は北朝鮮が韓国に飲み込まれるのを何としても避けたがっているはずだ。

30代　中国には中国の民主主義があると習近平政権は強調する。それは経済的な自由を認める一方、政治的な自由を抑圧する「民主主義」だ。中国国民は内心「そんなものは民主主義ではない」と思っているはずだ。

年金　私の推察では逆だ。たいていの国民は習らの言うことを信じていると思う。

民主主義はそれ自体が目的ではなく、人間の自由を拡張するための手段と考えれば、さまざまな形のものがあって当然という考えが成り立つ。西側とは違う「中国の民主主義」という考え方もそこから導き出される。

人間は民主主義の時代よりはるか以前から自由を求め続けてきた。その手段はその時代の富の大小によって決まった。政治的な自由についていえば、富の乏しい時代は独裁者だけが自由を享受した。少し豊かになると、複数の権力者が享受するようになった。やがて民主主義の時代を迎えて国民全員がそれを手にした。

もし中国の国民が現在ほど豊かな暮らしをしていなかったら、「中国には民主主義がない」「独裁をやめて民主化せよ」といった声が噴出するかもしれない。1989年の天安門事件に至った学生、市民らの民主化要求運動はそんな民衆の声を代弁したものだった。

それは改革開放政策によって絶対的な貧困からは脱しつつあったものの、まだ今のような豊かさには達していない時代に起きた。貧困からの脱出によって自立意識を強めた国民は政府への批判意識も強め、いまだ十分に豊かとまではいえない暮らしの不満を政府にぶつけた。貧困と豊かさの中間段階の時代に起きた運動という点では、半世紀前の全共闘の運動と似たところがある。

いま中国の国民は当時の日本国民より豊かな生活を送っている。インターネットの普及がそれに大きく寄与した。その豊かさが人びとの自由を拡張した。消費の自由、職業選択の自由、移動の自由を広げた。それは中国の資本主義の高度化によってもたらされた。習政権はそれを「中国の民主主義」の成果だと言うかもしれない。

ニュース日記　845

中村　礼治

「帝国」の資本主義